

ぼーせん

仙台市ボランティアセンター広報誌

BORASEN

vol.27

2025
Autumn

特集

東北生活文化大学短期大学部 障害理解センター養成研修



研修に参加した生活文化学科子ども生活専攻の皆さん

障害を理解し、もっと寄り添うために

仙台市ボランティアセンターでは、障害のある方が講師となり、障害に対する理解者を養成するため、仙台市内の企業や団体などを対象に、実体験を踏まえた講義やグループワークを行っています。障害って何だろう？ 障害のある方に必要な配慮について知りたい。そんな想いを胸に東北生活文化大学短期大学部の学生たちが、仙台市の「障害理解センター（ココロン・センター）養成研修」を受講しました。障害のある方が講師となり、講義やグループワーク、発表の場を通じて障害への理解や配慮について学び、自分たちにできることは何かを考える貴重な機会となっています。



短期大学部

Contents

特集

- 東北生活文化大学短期大学部
障害理解センター養成研修 1-3
- 企業の社会貢献 4-5
・みやぎ生活協同組合
・株式会社ヨシケイ宮城
- 子どもの居場所づくり支援 6
・あそぶカフェ
- ボランティアセンターからのお知らせ 7
- イベントインフォメーション 8

特 集

東北生活文化大学短期大学部
障害理解センター
養成研修

障害とは何かを考える

実体験に基づく講義&グループワーク

障害への理解を深めて 思いやりの心を育む



研修の様子



グループワークの様子

-学生たちの新たな気づきをサポート

仙台市の「障害理解センター（ココロン・センター）養成講座」を受講したのは、東北生活文化大学短期大学部の生活文化学科・子ども生活専攻の学生12名です。子ども生活専攻の学生は、将来、保育士や子どもに関わる仕事に就くことが多く、発達に特性のある子どもや障害のある子ども、そのご家族と接する機会もあることから、障害について学ぶことは大切です。

障害に対する理解を深めたいという学生たちの思いに応えて、講師を務めたのは精神障害の当事者でもある市川洋一さんです。市川さんは「障害は特別なものと思われがちですが、自分がその立場だったらどう感じるか、一緒に考えてほしい」と優しく語りかけ、障害のある方を取り巻く現状や身体機能の障害、さらには社会にあるさまざまなバリア（障壁）について、ご自身の実体験を交えながら、わかりやすくお話してくださいました。差別や偏見をなくすことの大切さも、心に響く



学びの成果を発表

言葉で伝えてください、学生たちは真剣に耳を傾けていました。

講座の後半では、グループごとに意見を出し合い、発表を行う時間もありました。学生たちは積極的に意見を述べ、「障害のある方とのコミュニケーションの図り方について具体的に学べた」「講師の実体験を通じて、特別扱いをしないことがいかに大切なことを学んだ」「相手の気持ちに寄り添うことの大切さを実感した」などといった感想が聞かれました。そこには学生たちの新たな気づきや、今後さらに学んでいきたいという熱い想いが感じされました。

今回の講座は、大学としても初めての取り組みでしたが、学生たちは貴重な学びの機会となっていました。障害のある方への理解は、結果的にあらゆる人への思いやりや配慮につながっていきます。誰かを思いやる心は、学生たちのこれから日常生活や将来の仕事の中でも、きっと大きな力になることでしょう。

大学生の声



VOICE

VOICE
01

生活文化学科 2年生 伊藤 悠介さん

ふだんの生活では気づかない多くのことを学びました。相手の話を最後まで聞き、思いを理解しようとする姿勢の大切さを感じました。また、何かを断る場面でも、しっかりと理由を説明し、相手が納得できるよう配慮することの重要性を知りました。今回の講演を通じて、障害のある方との関わり方を改めて見つめ直す良い機会になりました。

VOICE
03

生活文化学科 2年生 打川 友里愛さん

障害とは何かを学び、物理的・心理的なバリアについて考えることができます。仙台市が福祉のまちづくりの先駆けであることを知り驚きました。障害には見えないものも多くあり、誰もが安心して過ごせる合理的な配慮の大切さを実感しました。障害の有無にかかわらず、互いに支え合い、共に暮らしていく社会の実現に向けて、自分にできることを考え、行動していきたいです。

VOICE
05

生活文化学科 2年生 大野 友菜さん

障害があるだけで正当な理由もなく、拒否したり、不利に扱うような行為は決して許されない行為だと感じました。健常者でも障害者でも平等な生活ができるよう周りの人々が障害者の理解を深めていくことが重要だと思います。社会的障壁の除去を必要とする人々にとって合理的な配慮をし、ふだんから困っている方がいたら自分から積極的に支援をできるよう自分も心がけたいです。

VOICE
07

生活文化学科 2年生 小林 芽生さん

障害のある方を取り巻くバリアには、物理的・制度的・情報的・心の4つがあることを知り、特に心のバリアは周囲の理解や配慮の欠如から生まれることに気づきました。私たちができるることは、正しい知識を持ち、相手の立場に立って考えることだと思います。何気ない言動が障壁になることもあるため、思いやりをもって接する姿勢を大切にしたいと思いました。誰もが暮らしやすい社会を目指して行動していきたいです。

VOICE
09

生活文化学科 2年生 佐藤 凜さん

実際に研修を受けて、今までの「障害」についての考え方が変わりました。「障害」と聞くと偏見を持ってしまい、障害を持つ人は特別扱いをされてしまうことがあると思います。私は「障害」があっても、私たちと同じ生活をしていると考えています。偏見があっても障害を軽蔑しないで欲しいと思います。

VOICE
11

生活文化学科 2年生 芳賀 愛菜さん

障害者に対する思いは、少しある「かわいそう」という気持ちがありました。実際に障害の方から直接お話をいただき、障害者について身近に感じられました。特に社会にある障壁、バリアについて深く考えさせられました。身体障害、精神障害、知的・発達障害についてそれぞれバリアが違う、対応も違うので個々の障害に合わせた援助方法を理解しておく必要があります。障害の方々と接するときは、特別な人ではなく、ひとりの人に接するようにすることが大切だと学びました。

VOICE
02

生活文化学科 2年生 上杉 莉奈さん

実際に障害のある方のお話を聞くことで、これまで教科書や映像で得ていた知識とは異なり、その方自身の言葉や表情からリアルな思いや葛藤を感じることができました。「支援される側」ではなく「共に生きる存在」として関わる大切さや、配慮しながらも対等な関係性を築くことの重要性を学びました。ひとりひとりが違っていて当たり前という感覚を持つことが大切で、私自身の関わり方や考え方を見つめ直す貴重な機会となりました。

VOICE
04

生活文化学科 2年生 大竹 美夢さん

障がい者と社会の間には4つの障壁があることを知りました。街で障害者が困っている様子を見かけたときは、手助けが必要か本人に確認し、配慮や援助を考えることが必要です。また、障がい者への配慮を「特別扱い」だと捉えるのではなく、健常者と同じ機会を得ることで、当事者の思いが社会全体に浸透していくことも大切です。障がいがある人も安心して共生できる社会の仕組みを整備していくことが大切だと学びました。

VOICE
06

生活文化学科 2年生 小川 桜さん

私が今まで障害者の方々に抱いていたイメージが大きく変わることはありました。私が想像していたより障害者というだけで様々な偏見や不当な扱いを受けている現状を知ることができました。私たちでもすぐにできることとして、身近にいる困っている人の手助けが出来るようにしていきたいと強く感じました。お話で出てきたような社会にある障壁が緩和されていくことを願っています。

VOICE
08

生活文化学科 2年生 佐々木 萌音さん

障害のある方の体験談を聞き、日常生活の中で私たちが気づかない不便が多くあることを知りました。困ったときに周囲の理解や支援があることで、安心して生活できるということを知りました。障害のある方が過ごしやすい社会をつくるために、自分にできることを考え、行動していきたいと思いました。

VOICE
10

生活文化学科 2年生 菅井 香那さん

精神障害を「障害=困難」ではなく「特性」として捉える考え方で心を打たれました。実際に当事者の生の言葉を聴くことで、自分の中に無意識の偏見があったと気づかされました。特に「障害は可能性への挑戦」や「利点に焦点を当てるポジティブな視点」は希望を持つ力になると感じました。支援者や社会が環境調整や配慮を積み重ねることで、当事者が「自分らしく安心して暮らせる場」をつくる責任を強く感じます。当事者を「特性を持つひとりの人」として尊重し、目標を合わせて関わる姿勢を持ちたいです。

VOICE
12

生活文化学科 2年生 辺見 奈々さん

障害の有無にかかわらず、「同じ人間」であるという視点の大切さを改めて感じました。合理的配慮とは特別扱いではなく、誰もが能力を発揮できる環境を整えることだと学びました。「ダメ」と決めつけるのではなく、どうすればできるかを共に考える姿勢が求められています。ひとりひとりに寄り添い、多様性を受け入れることで、より良い共生社会の実現につながると感じました。これからも相手を尊重する関わりを心がけたいです。

社会貢献

みやぎ生活協同組合

地域に貢献する学生や学校を応援



▲みやぎスマイル基金の目録贈呈



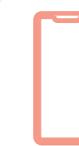
▲みやぎスマイル基金活動報告会の様子

みやぎ生活協同組合(みやぎ生協)では、株式会社日専連ライフサービス(仙台市青葉区)と一緒に、「COOPトリプルカードみやぎスマイル基金(以下スマイル基金)」を通じて、地域のために取り組む学生や学校の活動を応援しています。この基金は、みやぎ生協のお店で「COOPトリップルカード」を使うたびに、1回につき1円を積み立てられ、基金の財源となっています。宮城県内の高校や専門学校、学生団体など、地域づくりや地域の活性化に取り組む活動が対象となっています。自然環境の保護や防災・減災など、取り組み内容はさまざまです。令和7年度は15の団体を支援し、各団体へエールの気持ちを込めて、基金の目録は直接お届けしています。活動が終わると、2月に「みやぎスマイル基金活動報告会(一般の方も観覧可能)」を開き、学生や学校同士のつながりをさらに広げています。

みやぎ生協生活文化部の伊藤浩子さんは「スマイル基金には、多くのみやぎ生協のメンバーの皆さんのがカード利用を通じて協力してくださっています。地域に熱い想いを寄せている若い方々の経験と活動が、これから地域

の力になってほしいですね」とお話をされていました。みやぎ生協では、スマイル基金の他にも社会貢献につながる活動を行っています。こども食堂への支援として、みやぎ生協が事務局を務めている「みやぎこども食堂ネットワーク」もそのひとつ。「こども食堂エールアクション」として新たにネットワークに入会した団体には、食材の購入などに使えるCOOPギフトカードを寄贈し、宮城県内にあるこども食堂の活動を応援しています。こどもたちの笑顔のために、これからも無理なく、長く活動を続けてもらえたうという想いがそこには込められています。

詳しく知りたい方は



「COOPトリプルカードみやぎスマイル基金」について詳しく知りたい方は、インスタグラムをチェックしてみてください。



社会貢献

株式会社 ヨシケイ宮城

食材の配達が高齢者の見守りに



▲食材配達を通じた見守り活動



▲ヨシケイ宮城の本社



▲冷蔵庫の寄贈

高齢のひとり暮らしの方が増えている中、株式会社ヨシケイ宮城では、日々の食材配達を通じて地域の見守り活動を行っています。配達時に「その後、お変わりはありませんか?」と声をかけることで、高齢者の方々のちょっとした変化に気を配っています。

この見守り活動は、ヨシケイ宮城のスタッフが、あるお宅で食材が取り込まれていないことに気づき、「もしかすると何かあったのでは」と思い、すぐさま警察に通報を入れた経験がきっかけとなっています。それ以来、ひとり暮らしの高齢者への配達の際は、いつもと違う様子に気をつけるようになり、ごく自然な形で見守り活動が始まりました。県内一円をカバーするヨシケイ宮城のスタッフは総勢70名ほど。そのネットワークをうまく活かしながら、「地域の中でできることを」という想いで、ふだんの配達業務の中に見守りを取り入れています。

「高齢者の皆さんの中には、スタッフとの会話を心待ちにしている方も多いんですよ」とお話ししてくださいったのは、営業部の渡邊優人さんです。「なかには認知症

の方やお体の不自由な方もいらっしゃるので、ときには地域包括支援センターやホームヘルパーさん、離れて暮らしているご家族さんとも連携しながら、私どもにできるサポートを続けています。

また、ヨシケイ宮城では、冷蔵庫を地域の子ども食堂に寄贈する取り組みも行いました。「食卓から笑顔に」というヨシケイ宮城の想いは、さらに大きく広がって、地域に笑顔の大輪を咲かせています。

食を支える一助として

ヨシケイ宮城では、食事の準備に困りの方のために、冷凍弁当の無料試食も行っています。お申し込み期限は月単位で設定しておりますが、年内は継続して実施の予定です。詳しくはお問い合わせください。



子どもの居場所づくり

～子どもたちの「やってみたい」を応援～

あそぶカフェ（仙台市青葉区）



ーちびっ子ひろばで「できた自分」にニコニコできる

青葉区旭ヶ丘のちびっ子広場(だいどうじひろば)に、こどもの笑い声が響く「あそぶカフェ」があります。「あそびのうつわをかんがえる会」の皆さんと運営するこども食堂で、こどもの「やってみたい、遊んでみたい」という気持ちを全力で応援しています。

「ここは勉強をする場所ではありません」とスタッフが声を揃えるように、「あそぶカフェ」の魅力は、なんといってもこどもがやりたいことに熱中できる点です。ゲームをしても、走り回っても、おしゃべりに夢中になってしまってOKです。遊べる環境を整えるプレーリーダーさんや、ボランティアの学生たちがこどもが思い切り遊べるように、見守り、寄り添います。

そして、もうひとつの大きな特徴が、こどもが自分たちで作る食事です。みんなで協力しながら「これ、どうする?」「こうしたらしいかも」と声を弾ませながら、失敗を恐れずに食事作りにチャレンジしていきます。完成した時の笑顔は、まるでキラキラの宝物です。自分たちで作って食べる所以、大人に「作ってくれてありがとう」とは言いません。こどもは、大人の温かな目で見守られる、ちびっ子広場という外遊びができるこども食堂で、「やってみたい!」にチャレンジしています。

INFORMATION

詳しくは
「あそぶカフェ」
のInstagramを
ご覧ください。



仙台市ボランティアセンターからのお知らせ

仙台市ボランティア連絡協議会の活動について

ボランティア連絡協議会の出前講座とは?

ボランティア連絡協議会のスタッフがご指定の場所に出向いて、皆さんと一緒に手づくりの小物を作る講座です。作った小物を地域の高齢者やこどもたちに届けることもでき、その活動が地域の方々の笑顔につながります。

活動の様子(結いの会・高森東)



申込受付 基本平日で1か月以上前までの申込受付

申込・問合 仙台市ボランティアセンター TEL 022-262-7294

|ボランティアフォーラム

今年は、東北学院大学五橋キャンパスにて「今求められる多様なボランティアのあり方を考える」というテーマでオープンディスカッションや、活動展示等を行います。ボランティア活動のきっかけ探しや、続ける秘訣、魅力など“見つける・つながる”フォーラムにぜひご参加ください。令和6年度の開催の様子は仙台市社協公式YouTubeチャンネルをご覧ください。

開催日

令和7年11月22日(土) 10:00~12:30

場所

東北学院大学五橋キャンパス
シュネーダー記念館1階「未来の扉センター」
(仙台市若林区清水小路3-1)

申込・問合

仙台市ボランティアセンター TEL 022-262-7294



△令和6年度のステージ発表と
ワークショップの様子

仙台市社協公式
YouTubeチャンネル

令和6年度ボランティア
フォーラムの様子はこちら



イベントインフォメーション

| 第8回ごみ拾いボランティア交流会

3名1チームで行うチーム対抗戦のごみ拾いです。時間内に回収したごみの量や歩数で競い、上位入賞チームには豪華景品も!?ボランティア活動に取り組むきっかけや、企業や団体同士の交流の場としてぜひご参加ください!これまでの開催の様子は仙台市社協公式YouTubeチャンネルでご覧頂けます。

開催日 令和7年10月4日(土)

8:30~10:00(雨天中止)

場 所 五橋公園(仙台市青葉区五橋1-1)

参加条件 3名1チームでの申込(企業・団体・家族・友人等)

申込・問合 仙台市ボランティアセンター TEL 022-262-7294

参加者
募集中



| 障害理解センター養成研修

障害のある方が講師となり、実体験を踏まえた講義を行います。一緒に「障害」について考えてみませんか?

開催日 令和7年11月29日(土)

10:00~11:30

場 所 EARTHBLUE仙台勾当台8階会議室1

対 象 仙台市内在住もしくは通勤・
通学をしている方(定員30名)

参加者
募集中
定員30名



青葉区ボランティアセンター

仙台市青葉区二日町4-3 仙台市役所二日町分庁舎1階 TEL 022-265-5260

青葉区宮城支部事務所

仙台市青葉区下愛子字観音堂27-1(仙台市宮城社会福祉センター内) TEL 022-392-7868

宮城野区ボランティアセンター

仙台市宮城野区原町3-5-20 メゾン坂下1階 TEL 022-256-3650

若林区ボランティアセンター

仙台市若林区保春院前丁3-1 若林区中央市民センター別棟1階 TEL 022-282-7971

太白区ボランティアセンター

仙台市太白区長町南3-1-30南部アーチル1階 TEL 022-248-8188

泉区ボランティアセンター

仙台市泉区七北田字道48-12(泉社会福祉センター内) TEL 022-372-2603

▼掲載記事に関するお問い合わせは仙台市ボランティアセンターまで▼



社会福祉法人

仙台市社会福祉協議会

仙台市ボランティアセンター

〒980-0011

仙台市青葉区上杉1丁目6-10 EARTH BLUE 仙台勾当台6階
TEL 022-262-7294 FAX 022-216-0140

▼ホームページはこちら

<https://www.shikyo-sendai.or.jp/>

仙台市ボランティアセンター

検索

